

エグモントと国民高等学校

「folkホイスコーレ」は「国民高等学校」と訳される。発祥の地はデンマーク。100校近くがそれぞれ特徴を持って運営されている。

創始者は、「デンマークの精神の父」といわれるN・F・S グルントヴィ。詩人で牧師、歴史学者、神学者でもあり、偉大な思想家、デンマーク国民精神の改革者といわれる。1783年9月8日生（わたしと一日違いのバースデー）で1872年没。彼の思想は内村鑑三や宮沢賢治が学んでいる。

グルントヴィは、1830年代のイギリスに留学した。学生と教員の共同生活に驚いた。授業や講義以外でも、食事をともにし、広場で遊び、午後のお茶の時間をはさんで互いに討論しあう。学生は教師の見識に敬意を払い、教師も学生を尊敬する。（映画「ハリーポッター」の寄宿舎生活かな）

そして新しい社会発展における「自由」に感銘を受け、「精神の自由」が教育にとって最大で唯一の条件であると確信した。そんな体験が、folkホイスコーレでの教育の原型になったようだ。

農民青年たちの国民高等学校での学びを土台として、その後のデンマーク社会をリードする協同組合運動に発展する。

「folk」の連帯思想が、デンマークの人びとを結びつけて高度な福祉国家をつくりあげたアイデンティティではないか（小池直人『デンマークを探る』より）

私たちが訪問するエグモント・ホイスコーレも



そのデンマークの歴史の流れの中にある。



スカネボーから朝靄の中を抜けて40分ほどでハウに着いた。

エグモント・ホイスコーレで教員として15年以上勤務している片岡豊さんから説明を受け、授業を見学させていただいた。



ホイスコーレ（国民高等学校）は、寄宿制で入学資格はない。「技術を身につける」というところではなく、デンマークの歴史や政治、一般教養科目に、体験型の美術やスポーツ、料理、裁縫などから学生自身が自由に選択して学ぶ。

エグモントは、障害のある人に配慮した学校。現在196人いる学生の半数は障害者で、40人は電動車いすを利用し介助が必要。

デンマークでは、障害者が介助者を選んで雇う制度＝「オーフス方式」といわれるパーソナルアシスタント制度があるのでそれを活用している。

パーソナルアシスタントもエグモントでは「学生」となる。雇い主の障害者が学校にいる10時～15時半の間は、アシスタントは「学生」として自分の好きな授業を受講できる。

朝起きて、朝食がおわるまでがまず介助の仕事。

10時半～休憩時間までは、好きな授業を受け昼食時は介助の仕事。それ以後は「休憩時間」なので、授業を受講。そして15時半以降～寄宿舎で寝るまでが介護の仕事

つまり、働きながら受講できるのがエグモントの独特の制度で魅力。アシスタントはフルタイムで働くと約30万円／月の収入がある。エグモントの学費と税金を払った残りがおこづかいとなる。

なので、エグモントには全国からたくさんの障害

者があつまる。成人の障害者の国全体の特別教育費の8割がここに集中している。居心地がよすぎて、平均3、4年ここで学び、10年いる人もいる。

「エグモントを卒業？終了？したら どうなっていますか？」

アシスタントの場合、大学の医学部に学んだり、理学療法や作業療法の専門家になる人もいる。自分はこの仕事に向いていないからと他の職種にいく人もいる。海外を旅しながら将来を決める人もいる。障害者の場合ケア付き住宅で暮らす。

一般就労は難しい。作業所などで働くこともある。しかし、なかなか有意義な日中の活動を提供する場がなくて、社会的な問題になっている。

住まいは自治体が1LDKの住居を探してくれる。問題は日中の中なにをするか。就労、進学の問題がある。

最近、障害者は3年間の実質的には高等部にあたる教育＝STUを受けることができるようになった。自分で学びのカリキュラムを組むことができる。エグモントで1年学び、他のところで2年学ぶこともOKだ。ここでは3年間を通してSTUを受けている学生が20人いる。



オーレ校長も加わった。教育者であるとともに相応な経営者という印象がある。

エグモントの学費は一人1週間 1700 クローネ。学費は宿泊料・食費込み。秋の4～5日、春の2週間の研修旅行費は学費に入っている。アフリカや日本に行くときは自己負担も発生する。

春コースは24週間。秋コースが18週。1週間ごとの夏休み短期コース。それと、クリスマスコースもある（クリスマスにどこにもいけない人対象）。基本的には半年ごとのスパンだが、障害者は平均で3～4年すごす。

定員は196名。寄宿舎のベッド数その定員となる。重度の障害者1人に介助者が3～4人必要なら、それだけ介助者のベッドが必要になる。なので学校経営上も介助者を必要とする障害者の入学が優先される。

次に自立度の高い障害者、3番目に外国人。とくに開発途上国からは障害者団体が招待して、半年間滞在している障害者が10～12人いる。



1997 年からは片岡先生が勤務してくれるようになって日本人の特別枠ができた。

職員数は他の学校より多い。教員 40 人。その他教員補助員が 40 人。ヘルパー 10 人。その他厨房スタッフなどで合計すると 110 数人。寄宿制なので夜勤も必要だ。教員も夜勤をする。一か月に1回くらい。他の国民高等学校なら1週間に1回くらい。

この学校の教員は10年ぐらい勤めていないと仕組みがわからない。校長の自分は、国の社会省の特別支援教育カウンセラーもしている。いろんな国の省庁とのパイプがある。なので「経営者としての腕がいいからお金を引っ張ってこれる」。オーレ校長は自治体の議員もしているそうだ。



その後、オーレ校長物語の講演があった。

脳性マヒの父が学校をつくり、2歳からこの学校で過ごしている。父は1951年に身体障害者のためのホイスコーレンを作ると発表。1956年に敷地や建物を購入、教育省が許可。オーレは学校の2階に住み、父をかついで一日2～3回行き来した。当時のデンマーク首相は学校の理事で、首相の妻が勤める大きな出版社が多額の寄付をした。その名前がエグモント基金。エグモント・ホイスコーレンの名前の由来となった。

当時、首相、社会大臣、教育大臣、エグモント教育基金の人があつまってプールをどうつくるか話し合った。しかし首相が亡くなると、父も疲れ、プールは断念した。

1960～70年代に学生運動があり、障害者だけの学校からすべての人の学校になった。父はアルコール&精神的に悪くなり、1972年に校長をやめた。

オーレは1980年の青年教育のインクルージョンがうたわれる法律づくりにかかわり、1981年に文部大臣の特別顧問になった。そこで障害者教育は何かを指導した。そして1991年にエグモントの校長に就任。「この学校を退職するまでにプールをつくるんだ」と宣言した。そして親子念願の温水プールができた。

「水に入らなければ泳ぐことは学べません。人生はやってみなければ楽しむことはできません」

(蘭部英夫)